

「タジキスタン国別特設野菜栽培」コース帰国研修員同窓会の活動 小規模温室試験プロジェクトへの取り組み

昨年 7 月、JICA 筑波国際センター(JICA 筑波)で 2000 年から始まり 2003 年に終了したタジキスタン国別特設野菜栽培コースの帰国研修員フォローアップに招聘され、帰国後の活動現場の視察や彼らが主催した野菜栽培技術セミナーに参加する機会を得た。

タジキスタンの多くの温室はこれまでコルホーズ、ソホーズの中で運営されていたが、ソ連邦崩壊後それらは自営農家に移管された。しかし、自営農家による温室栽培は冬季の暖房経費の捻出や維持管理などの問題もあり、現在多くの温室が休止状態になっている。一方、冬季の新鮮野菜は以前に劣らず高い需要があり、国内での野菜生産拡大の要求は高まるばかりである。このような背景の下、JICA 筑波で野菜栽培技術の研修を受けた帰国研修員は、自国の経済状況に合った建設コストが低く、そして暖房経費を少なくできる栽培技術の検討を行い、温室施設の調査活動を実施した。その結果、自国内で調達できる藁などを保温資材として使った温室の情報を入手した。この温室は自国の技術レベルで建設でき、目的とする冬季の野菜栽培に耐える保温機能を有するものであると判断されたが、初期投資の資金調達に問題があり具体化されていなかった。

滞在中多くの帰国研修員と話す中で研修の成果を具体化・現実化するため、研修員のグループ化を図り資金援助を受けられる母体 = 「同窓会」作りを呼びかけた。その結果、短期間に同窓会の定款が準備され自国法務省に提出・審査の結果、同国国家統計委員会により同年 8 月 17 日付で第 3070 号として登録された。登録後、同窓会会員は以前にも増して積極的にセミナー活動に従事し、農家や学生を対象に技術普及に努めている。

同窓会会員は前述した活動を実施すると共に、JICA のフォローアップ制度を利用し、崩壊した温室栽培の建て直しを図るプロジェクトを企画、在ウズベキスタン JICA 事務所にフォローアッププロジェクトとして申請した。申請したプロジェクトは圧縮藁パックを断熱・保温資材に使い、電気による暖房経費を極力抑えた小型温室を帰国研修員で建て、実証栽培を通して温室栽培の普及を図り、農産物生産による収入向上につなげ農民の生活安定に資する事業である。温室の建設と年間栽培試験経費、プロジェクト運営人件費、そして事務経費など合計 US\$25,270 の初年度経費を計上している。この内、同窓会で賄う分を差し引いたものをプロジェクト費用として申請している。

「タジキスタン国別特設野菜栽培コース」帰国研修員の同窓会活動は、調査活動の実施、セミナー開催、法人化と順調に進んで、本年には JICA へプロジェクト事業の申請まで行えるようになってきている。残念ながら温室栽培プロジェクトは今年中の許可は得られなかったが、今後の同窓会活動による本事業の実現のための技術的な支援と事業化への諸手続の助言など、出来るだけ協力していくつもりである。JICA による研修事業とこのような帰国研修員の活動との連携により、研修成果の発揚を生むことになる。

(2005 年 10 月、長谷川)



今は使われていない鉄パイプ製のハウス



内戦で崩壊したダッチライト型温室